

# 帝国航路を 往く

2019年11月30日(土) 14:00~  
成城大学 8号館3階 831教室

講演 **木畑 洋一**  
(東京大学名誉教授・成城大学名誉教授)

コメンテーター **吉田 信** (福岡女子大学)  
**日比 嘉高** (名古屋大学)  
**栗飯原 文子** (法政大学)

司会 **中村 理香** (成城大学)



# 帝国航路を往く

## シンポジウム開催趣意

木畑洋一著『帝国航路を往く——イギリス植民地と近代日本』（岩波書店、2018年）は、1860年代以降の約100年間に、帝国の中心地ヨーロッパへ渡った日本人を考察対象とする歴史書である。かれらが「帝国航路」の寄港地で、大英帝国の植民地ないしはその強い影響下にあった地域に住む人々——現地民や移植された英植民地臣民——へ向けたまなざしを、変動する帝国世界との関係から検証する。

本書のテーマは、日本における帝国主義的三角形の原点として、近代世界での日本の立ち位置や国民国家／帝国の形成を考える上で大きな示唆に富む。グローバル・パワーとしてのヨーロッパの帝国とその支配下にある地域はいずれも、「日本」がそうなりえた生の様態——片方でそれを欲望し、もう片方ではそうなることを恐れた——を示すものであった。帝国航路を移動した日本人エリートが示す、欧米列強への憧憬や同一化の願望、人種差別への怒りや自尊心の傷つき、その裏返しとしての承認欲求や応報感情と、もう片方で被支配地域の人々に対する優越感や憐み、侮蔑感情と、それらの根底にある不安や「まなざされる自己」への怯え、そして時に表された共感や連帯意識は、「日本」という自己を映し出す鏡として重要な現在の意義をもつ。

本シンポジウムでは、ヨーロッパの帝国を目的地として、本来そこへ目を向けていた日本人が期せずしてその支配下にあった人々に投げかけた多様な視線を検証することで、現代にも通じる帝国を介在させた日本の人種意識や、クロス・ナショナルな階級およびジェンダー的他者認識、またそれらと絡み合った「国民意識」の形成について、ローカルとグローバルのせめぎ合いとしての「グローバル」という視点から考えたい。

## 成城大学へのアクセス



小田急線  
成城学園駅前 北口  
徒歩3分

※急行は停車しますが  
「快速急行」は通過します。

## 登壇者の紹介

### 木畑 洋一（きはた よういち）

東京大学名誉教授、成城大学名誉教授。著書に、『イギリス帝国と帝国主義——比較と関係の視座』（有志舎）、『二〇世紀の歴史』（岩波新書）、ほか。編著に、『大英帝国と帝国意識——支配の深層を探る』（ミネルヴァ書房）、『イギリス帝国と20世紀（5）現代世界とイギリス帝国』（ミネルヴァ書房）、ほか。

### 吉田 信（よしだ まこと）

福岡女子大学准教授。論文に、「オランダ領東インドにおける旅券制度の展開——植民地パスポートの様式と機能をめぐって——」『国際社会研究』第7号、「旅券・国籍・公定アイデンティティ——蘭印における台湾籍民の国籍証明をめぐって——」『立命館国際研究』31-5、ほか。

### 日比 嘉高（ひび よしたか）

名古屋大学准教授。著書に、『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所』（新曜社）、『文学の歴史をどう書き直すのか——二〇世紀日本の小説・空間・メディア』（笠間書院）、ほか。

### 粟飯原 文子（あいはら あやこ）

法政大学准教授。翻訳に、チヌア・アチェベ『崩れゆく絆』（光文社）、チゴズィエ・オビオマ『ぼくらが漁師だったころ』（早川書房）、ほか。

### 中村 理香（なかむら りか）

成城大学教授。著書に、『アジア系アメリカと戦争記憶——原爆・慰安婦・強制収容』（青弓社）、ほか。

## お問い合わせ先



成城大学グローバル研究センター

Tel: 03-3482-1497 (内線 787)

Email: [glocalstudies@seiyo.ac.jp](mailto:glocalstudies@seiyo.ac.jp)

<http://www.seiyo.ac.jp/glocal>

※参加費無料

※事前申込み不要